

協同の叢見

きょうどうのはっけん



第286号 2016.9

特集 支え合う農村と都市の協同実践

- ◎陸前高田市 森の前地区における都市と農村の協同実践 勝沼 雅典
- ◎山田地域都市農村交流協議会に参画して 村上 敦子
- ◎地域づくりの主体者として～協同組合の可能性と課題～ 蔦谷 栄一

■協同の広場

- ◎ケア学概論～ケアとは何か～ 加藤 彰彦
- ◎沖縄の自立的発展と協同労働シンポジウム 伊波 洋一、加藤 彰彦、永戸 祐三

■会員だより

- ◎協同組合運動のハイブリッド関係-生活クラブ・ネット・ワーカーズ- 米倉 克良

■巻頭言

「支え合い」から「頼り合い」へ 玉木 信博

■ 巻頭言

「支え合い」から「頼り合い」へ

..... 玉木 信博(センター事業団事業推進本部/協同総研理事) 2

■ 特集 支え合う農村と都市の協同実践

・ 陸前高田市 森の前地区における都市と農村の協同実践

..... 勝沼 雅典(センター事業団 東北復興本部 陸前高田事業所) 6

・ 山田地域都市農村交流協議会に参画して

..... 村上 敦子(センター事業団 富山地域福祉事業所) 16

・ 地域づくりの主体者として ～協同組合の可能性と課題～

..... 葛谷 栄一(農的社會デザイン研究所/会員) 21

■ 協同の広場

・ ケア学概論 ～ケアとは何か～

..... 加藤 彰彦(沖縄大学名誉教授/会員) 28

・ 沖縄の自立的発展と協同労働シンポジウム 報告

閉会あいさつ 藤田 徹(センター事業団理事長/会員) 40

ミニ講演 41

伊波 洋一(参議院議員) 「地方自治と協同労働」

加藤 彰彦(沖縄大学名誉教授/会員) 「沖縄の子どもと人間の再生」

永戸 祐三(日本労協連理事長/協同総研常任理事) 「沖縄の未来と協同労働」

鼎談 伊波 洋一 × 加藤 彰彦 × 永戸 祐三 48

閉会あいさつ 奥 治(センター事業団 九州沖縄事業本部本部長/会員) 54

■ 会員だより

協同組合運動のハイブリッド関係 -生活クラブ・ネット・ワーカーズ-

..... 米倉 克良(生活クラブ生協・東京/会員) 58

■ 労協連だより 田嶋 康利 63

■ 研究所だより 岩城 由紀子 66

巻頭言

「支え合い」から「頼り合い」へ

日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会センター事業団 事業推進本部
協同総合研究所 理事 玉木 信博

信州の南、天竜川が村の中心を流れる中川村に暮らして1年になる。

山梨県側の南アルプスと岐阜県側の中央アルプスに挟まれた伊那谷は、これから実りの秋へと一気に進み、地域(集落)ごとに自然の恵みに感謝する小さな祭が催される。

祭は住民の暮らしと共にあり、都会から移住した私たちも温かく迎え入れて頂き、農村の共同体に触れることができる貴重な機会でもある。

さて、一般的に農山漁村には、まだまだ共同体が息づいており、「支え合い」の文化もまだ生きていと言われる。しかし、実際に農村に暮らしてみると、「支え合い」という言葉とは、少し感覚が違う。「支え、支えられる」というよりむしろ、「頼る、頼られる」が実感である。

私の近所に70歳代の一人暮らしの方がいる。彼は、春から夏にかけて近所の一人暮らしの高齢者の庭や田畑の草刈りに毎日出かける。自分の庭でもなければ、農地でもないし、たくさんの謝礼等をもたらしている

訳でもない。地域の人びとから頼られているのである。農村において、草刈りは何より重要な暮らしの中の仕事であり、夏になると、どこも刈払機の音が毎日鳴り止むことはない。

「支える」という言葉の主語は、支える側にあるのだが、「頼る」という言葉は、支えられる側が主語となる。だから、頼られる方は、むしろ頼る側によって、その力を発見され、認められ、依頼され、そして応答する。「頼る」は「支える」というような力強さも感じない。そうやって、他者から頼られた自己を他者を通して気づき、地域社会での自らの役割や出番が生まれてくる。しかし、東京で育った私には、この「頼る」という事が、なかなか上手くない。村の人に比べたら、あれもこれも何もできないのだから、頼りたいことは山ほどあるのに。

なぜなら、「頼る」ことも「頼られる」こともお互いが深く知りあっていなければならぬ。私などは、この地で生まれ育っていないのだから、自分自身の内面を意識

的に開いていく必要があるのだろう。農村で暮らしていると、暮らしの中のコミュニケーションはあらゆる場面に存在していることに気づく。それは、自宅でもあるし、田畑でもあるし、役場でもあるし、道端でもある。

例えば、哲学者の内山節氏は「農林業を考える」(「農村文化運動」1995年10月号)の中で、「伝統的な農家では、居住空間、仕事空間、接客空間は、分けられないものとして存在していたのではないか」と述べている。さらに、「かつては労働と生活は一体的に営まれていたという言われ方がされるが、忘れてはならないことはここに接客という面がふくまれていること」であると。ここで言う、「接客空間」とは、家屋であり、農地であり、山林であり、「接客」とは村人

のコミュニケーション的なものとしている。

私自身が、都市と農村の暮らしを比較したとき、最も実感としてあるのは、この対話(関わり)を生み出す具体的な場の多様性である。こうした場が多くあるというのは、人を一面的にとらえるのではなく、多面的に感じられることにある。

このことは、協同労働の定着と深化に、ひとつのヒントになるかもしれない。事業を通じた職場だけでは感じることはできない他者の内面を知るには、主体者として関わる場を多様につくることが重要ではないだろうか。それは翻って仕事や地域との関係性においても、きっとお互いを受け止め合える関係性を育む。包摂力のある職場とは、そんなふうにして少しずつ形づくられるのだろうと思う。

協同総合研究所は、労働者、市民が自らの力で自律的に仕事と生活の豊かさを求める活動を支援するシンクタンクです。わが国にも「大量失業の時代」が到来する中で、労働者、市民が自主的に仕事おこしをする労働者協同組合(ワーカーズコープ)への注目が増えています。研究所は、わが国唯一の「労働者協同組合」に関する専門研究機関です。



研究活動をネットワークし、蓄積された情報を資源として支援する「協同の発見」を会員のみなさまに毎月お届けいたします。